

シリーズ

“キラリ企業”

の現場から 第34回

公社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業の現場から”。

第34回目は大手をうならす精密加工技術で、新規顧客開拓へ向けてたゆまぬ努力を続ける有限会社松井精機(板橋区)を紹介します。

同社は、異業種交流グループ(シーガル21TOKYO)や、昨年度実施の第1回八都府県市合同商談会にもご参加いただいております。

航空機産業への夢実現に応えるMC加工技術

有限会社松井精機

池袋駅から東京メトロ有楽町線・副都心線で約10分のところに小竹向原駅がある。駅を出て緑豊かな板橋区と練馬区の境を歩き、さらに環状七号線を越えた住宅と工場が立ち並ぶ一角に有限会社松井精機がある。取材に伺うと、二代目として加工技術を承継している松井懐社長が笑顔で迎えてくれた。

受け継がれるものづくり精神

同社は昭和33年、社長の父である松井惣一氏が、現在地である板橋区小茂根に精密部品加工工場を開設したことによりスタートした。

現社長の祖父が「下駄作り職人」だったこともあり、元来ものづくりに大変興味があった父惣一氏は、信念を持って仕事に励む祖父を見て、「精密加工技術」の道を選んだそうである。その祖父の信念とは、「下駄とは地面(底)と接するものであり、足元(基礎)を固めるという意味でもある。基礎を疎かにせず、高度な技術を磨き上げる」ことだ。そして社長も日夜懸命にものづくりに奮闘する惣一氏の後ろ姿を、幼い頃から憧れのまなざしで見えてきた。父の背中を追って同じ道に進んだのも十分うなずけることだろう。

昭和62年に社長職を引き継いだ現社長は、あることに気付く。それは「名は体を表す」。社長の父の名前である、「惣一」とは「『モノ(物)の下(中)には心』が宿る。心を込めてものづくり。そしてNo.



同社社長の松井懐氏

「1」を目指す。」ことを表しているのではないかと。父はまさに心を込めたものづくりを信条としていた。社長は、父がこれまでしてきた

ことは父そのものであることを再認識し、あらためて尊敬するとともに、自らを鼓舞し、高度な加工技術を目指して今まで努力してきたそうである。

大手をうならすマシニングセンター使い

一塊の金属から、写真のような入り組んだ凸凹や複雑な曲面が重なり合う部品を削り出す高度な加工。この作業を行う上で欠かせない「5軸マシニングセンター(注1)」と呼ばれる自動制御の工作機械は、現在主流の機械であり、中小はもとより大企業の金属加工工場などこも備える設備だ。しかし、機械は備えていても、金属の素材に合った刃物を選択し、どのように回転させて切り込んでいくかを考えることまでを自動化させることは難しい。

すべては材料を機械にセットする前に設定するプログラミングに凝縮されている。取引先から送られる3Dデータをパソコンに取り込み、素材の特性や完成後の形をイメージしながら数値を入力する。形が複雑であるほど工具の回転速度や切込みの深さといった数値の決定に神経を使う。わずかなズレが、不良の発生だけでなく、高価な超硬工具の破損につながるのである。

「工作機械の性能が上がっても、使い手によって成果は大きく変わる。汎用旋盤が主流の時代から40年以上にわたる経験に基づいて培われた加工ノウハウは、大手でもまねはできない」と社長は職人として絶対の自信を持つ。

取材時、工場内を歩いていると、あちこちに「社長作成」と書かれた1枚の紙が貼られていることに気付いた。アルミや鉄、チタンといったさまざまな材料を縦列に、ドリル、超硬エンドミルなどの工具を横列にして、入力する数値の目安をまとめたものである。この道40年以上の社長ならではの試行錯誤の「集大成」だ。

その「集大成」を見ながら社長に負けじと奮起する各社員

の姿を見て、社長は技術レベル向上のために設備投資をしてきた。社員も社長の誠意に応じて腕を上げる。このようにして高い技術を持っているからこそ、同社からは複雑な形状の部品が次々に生まれ、その部品(加工技術)を頼って、自動車、電気業界の各大手メーカーから「自分たちではできない」といって注文が舞い込んでくるのである。

社長の信条のひとつに、「取引先からの頼みごとは心を込めて対応する」がある。同時に「材料」に対する気持ちも忘れない。「切削中の音を聞いたり切粉の出方を見たりしていると、いかに材料が気持ちよく削られているかわかるんだよ」と松井社長。この感覚は昔ながらの旋盤やフライス盤を使いこなした職人でなければ分からない。わずかな時間でも作業場に顔を出し、今日も「材料の声」を確かめる。社長になった今でも昔と変わることなく、油にまみれながら旋盤やMCの加工技術向上に日夜明け暮れている。



五軸マシニングセンターで加工された複雑な形状の製品

積極的な新規顧客開拓

かつて自動車関係の仕事が8割を占めていた同社が転機を迎えたのは、平成19年秋に開催された「いたばし産業見本市」以降、「機械要素技術展」など各展示商談会への出展だった。

同社は「行政が提供してくれる大手企業との商談機会を生かすも殺すも企業次第」と常々考えている。そこで、加工困難と言われるチタン・インコネル材(注2)の切削部品を「いたばし産業見本市」で展示したのだが、それが大手航空技術者の目に留まり、航空部品メーカーとの交渉機会を得ることができたのである。

航空機のエンジン部品は金属加工業にとっては最高峰の仕事とされ、また社長自身にとっても仕事を始めた時からの長年の夢でもあった。これを機に社長は、仕事が少なくなるかも知れないが『Never Give Up』、『死ぬまで勉強』の意気込みで、技術を熟成させて本格参入に備えようと社員に決意を示した。

そして現在、念願だった航空機部品(エンジンの付属部品など)を供給し、最新鋭機にも部品が採用されているのである。

新規顧客に対応するためのISO取得

しかし技術力は優れていても、新規顧客からの要望の中にISO9001取得が挙げられてくることもたびたびあった。取得しなければ、受注が頭打ち、もしくは減少する恐れが大

いにあったのである。

そこで、平成20年6月に板橋区の助成制度を活用し、ISO9001を取得した。もちろん取得するのは簡単ではない。取得するには、社員が一丸となって業務を洗い出し、管理体制の整備に取り組まなくてはならない。だからこそISO9001を取得したということは、単に認証を取得したということだけでなく、個々の自立性とともに社内の団結力が今まで以上に強くなったことを裏づけするものでもあった。



今後の展開

長年の夢であった航空機分野への参入はまだ足がかりを得た段階。これからが本格参入の正念場という。

そのためにはまず、従業員12名の町工場である有限会社松井精機を積極的にアピールする場をもつこと。地場産業を発展させようと他地域に先駆けて努力している地元板橋区や、公社が開催する各展示商談会にも可能な限り参加して、航空機分野へのPRはもちろんのこと、新規開拓のチャンスは何とかものにして期待に応えたいと社長は考えているようだ。

また、会社をPRしていくツールとして大きな位置づけを占めているホームページを、同社を一層理解してもらえよう、見やすいものにリニューアルすることも、課題のひとつである。このようにして高い技術を生かすために、同社は絶えず挑戦し続けているのである。

雇用不安、円高による大幅赤字、急激な資金難など不況の嵐が吹き荒れる中、松井社長は挑戦を続けることを忘れていない。

(取引振興課 栗原誠峰)

(注1) 通常は多種多様の工具の自動交換装置を持ち、フライス加工や中ぐり加工など多様な加工を全自動で行う。同社のマシニングセンターはXYZの三軸に前後、左右への回転を加えた五軸加工機となっている。

(注2) ニッケルを主成分とした耐熱・耐食合金の総称。クロム、モリブデン、鉄などを含む。

企業名:有限会社松井精機
代表取締役社長:松井 懐
資本金:500万円
従業員数:12名
所在地:東京都板橋区小茂根4-19-12
TEL : 03-3972-1575
FAX : 03-3972-1576
URL:http://www.matsuseiki.co.jp